

## 取組実績の概要（2 ページ以内）

本取組の申請時の事業概要は、「受験生に大学で学ぶ目的を考えさせ、大学で学ぶ姿勢と意欲を持つことができるように育てるアサーティブプログラムと、そのことを検証するアサーティブ入試の開発」であった。アサーティブプログラムの特徴は、次の3点である。

- ① 高校生が大学で学ぶ意味に自ら気付くように、本学職員が高校生と個別面談をする。
- ② 高校生の基礎学力向上と計画的学習習慣を身につけるため、本学が独自に開発した MANABOSS システムを運用する。同時に、自分の意見を述べる力や他者の意見を受け入れる姿勢を養い、ものごとを多様な観点から考察する能力を育成するために、このシステム上でバカロレアバトルを行う。
- ③ 高校生が自分の活動を振り返って自己成長できるよう、アサーティブノートとコンタクトシートを用意し、個人面談結果やこのプログラムでの活動を記録する。

また、アサーティブ入試は、アサーティブプログラムでの成果が反映されるよう、意欲・能力・適性を面接やグループワークで評価し、基礎学力の達成度と合わせることで多面的・総合的な評価をする入試方式として展開してきた。

取組実績として、まず、第一志望入学者の割合が増加したことが挙げられる。本取組が始まる前にあたる平成 23 年度学生生活実態調査結果によると、本学を第一志望で入学した学生は 12.7%であった。本取組以前は、いわゆる不本意入学者が多数を占めていたと思われる。当時、本学ではこのことが教育活動全般に対して負の要因となっていた。本取組を開始して6年が経過した令和元年 GPS-A 調査結果によると、本学を第一志望で入学した学生は 52.5%に増加した。大学で学ぶ姿勢と意欲を自ら気付かせることに注力するアサーティブプログラムがこの増加に果たした寄与は大きいと考えられる。

次に、アサーティブプログラムが普及してきたことも実績としてあげられる。アサーティブプログラムの個別面談を受けた人数をみると、開始した平成 26 年度は 190 名であったが、令和元年度は 1,017 名で 5.3 倍となった。アサーティブ入試で入学した学生（以下、アサーティブ生）の入学者全体に占める割合をみると、開始した平成 27 年度は約 3%（全入学者 1,725 名に対してアサーティブ生 52 名）であったが、令和元年度は約 6.1%（全入学者 1,862 名に対してアサーティブ生 114 名）で、約 2 倍となった。ただし、アサーティブプログラムを受講し、他の入試区分で入学した学生を含めると令和元年度で 215 名となり、総入学者に占める割合は 17.7%となる。令和元年度入試から、アサーティブ入試の方式が変更され、基礎学力適性検査に英語を加えたことと合格最低点を引き上げたことにより、アサーティブ入試での合格者は減少している。しかし、アサーティブプログラム受講者が指定校推薦入試や公募制推薦入試、一般入試で入学しており、アサーティブプログラムが浸透してきていることを示していると思われる。

また、MANABOSS の登録者も毎年増加している。開始した平成 26 年度はアサーティブプログラム受講者の 60.5%（全受講者 185 名、登録者 112 名）、令和元年度は 69.9%（全受講者 972 名、登録者 679 名）が登録した。登録者の割合で 9.4%の増加、登録者数で 6.1 倍となった。その間、MANABOSS の搭載問題数も平成 26 年度には 606 問であったものが、令和元年度には 13,622 問と 22.5 倍に増やすことができた。その影響もあり、アサーティブ入試志願者の MANABOSS 利用率はほぼ 100%になっている。

さらに、本取組の効果を調査結果で実証できたことも実績としてあげられる。本学アサーティブ研究所とベネッセ教育総合研究所との共同研究の結果、アサーティブ生の意識や行動の実態として次のようなことが分かった。

- ① 全学で大学志望度・納得度とも上昇しているが、アサーティブ生は、他の入試区分で入学した学生と比較して最も高い。
- ② 全学的によい傾向にあると思われる指標（高校までの学習時間や多様な経験を持つ学生の割合など）では、アサーティブ生も同様の傾向が見られる。
- ③ アサーティブ生は他の入試区分で入学した学生と比較して「論理思考」「他者受容」「協働性」の数値が高く、他者と協力した課題解決に強みをもっている。
- ④ アサーティブ生は単位の取りやすさより、自分の興味にしたがって授業選択をする傾向が強く、「学びに対する意識」や「進路に対する意識・行動」が他の入試区分で入学した学生と比較して最も高い。

本取組は、推進される過程において、単なる入試改革でなく教育改革の一環として位置づけられるようになった。その結果、教育改革本部でのカリキュラムマップ策定、学生ポートフォリオシステムの開発や検定テストの導入、「学びつつ行動し、行動しつつ学ぶ」WIL プログラムへの発展につながった。また、学院内の併設校 2 校との AP (Advanced Placement) を中心とした高大接続プログラムの開発、滋賀県教育委員会との連携協定に基づく県立高校 5 校（八幡高等学校・甲西高等学校・大津高等学校・高島高等学校・玉川高等学校）を中心とした高大連携プログラムの開発も行われ、着実に成果を上げている。

| 【必須指標の達成度】  |                     |       |       |
|---|---------------------|-------|-------|
|   | 平成 26<br>年度<br>(起点) | 令和元年度 |       |
|   |                     | 目標    | 実績    |
| 多様な評価尺度による入学者選抜を経た募集人員の割合<br>[% (多様な評価尺度による入学者選抜を経た募集人員 / 募集定員)]      | 4.2%                | 32.9% | 5.5%  |
| 入学者選抜に従事する役割分担別教職員の割合【選抜方法の検討】<br>[% (右記のうち専任教員数 / 当該業務に従事する教員数)]     | 3.9%                | 4.4%  | 3.5%  |
| 入学者選抜に従事する役割分担別教職員の割合【選抜の実施：教員】<br>[% (右記のうち専任教員数 / 当該業務に従事する教員数)]    | 12.5%               | 44.3% | 11.7% |
| 入学者選抜に従事する役割分担別教職員の割合【選抜の実施：職員】<br>[% (右記のうち専任職員数 / 当該業務に従事する職員数)]    | 27.4%               | 13.1% | 59.1% |
| 入学者選抜に従事する役割分担別教職員の割合【合否判定】<br>[% (右記のうち専任教員数 / 当該業務に従事する教員数)]        | 4.6%                | 5.1%  | 4.1%  |
| 入学者選抜に従事する役割分担別教職員の割合【入試担当職員】<br>[% (右記のうち専任職員数 / 当該業務に従事する職員数)]      | 10.3%               | 9.8%  | 6.1%  |
| 入学者選抜に従事する役割分担別教職員の割合【入試方法評価・分析】<br>[% (右記のうち専任教職員数 / 当該業務に従事する教職員数)] | 4.5%                | 4.6%  | 3.5%  |
| アドミッションオフィサー(アサーティブオフィサー)数[人数]  | 1人                  | 3人    | 1人    |